

スクラム

SCRUM

1K05B030

指導教員

主査 太田章先生

内田 雄介

副査 間野義之先生

筆者は高校生の頃からラグビーを始め、大学の部活動でも最前列のフロントローでスクラムを組んできた。その中で「ラグビーはスクラムだ」という言葉を何度も耳にし大切にしてきた。事実スクラムが勝っているときには常に試合を有利に展開でき、反対に負けている時は不利な展開となった。しかし、筆者は大学に入り四回目になったシーズン、この聞きすぎてきた言葉をいつのまにかないがしろにしてしまっていた。春に慶応戦で負け、夏にはフランス戦で負け、秋には大学ラグビー対抗戦で54連勝目となるはずだった帝京に負けてしまった。そして、これらの全ての試合のスクラムは圧倒的に早稲田不利のスクラムになっていた。特に筆者も途中出場した対フランス大学選抜のスクラムは燦々たるものだった。試合後のインタビューでフランスチームのキャプテンが「僕らにはスクラムの哲学がある」と語っていた。ならば筆者のスクラム哲学とは何であろうか。そもそもスクラムとはどのようなものであるか、どうすれば強いスクラムが組めるのかを明確にする必要があると考えた。第一章では導入として様々なスクラムを見ていくことでスクラムについて深く理解し、どのようにすれば強いスクラムが組めるのであろうかということについて書いた。そのためにはコラプシング・1番側・3番側といった三つの視点からスクラムを見ていく。第二章ではスクラムコラプシングについてなぜ崩れるのかについて焦点を絞った。コラプシングはただ単に崩れているわけではなくその中では様々な駆け引きが行われていた。意図的にスクラムを崩す行為も時には必要であった。意図的な反則なのか力が拮抗して仕方がなく崩れて

しまったのかを見極めるポイントとして両プロップが構えた時の膝や肘の位置、ヒット後の立ち位置、足の位置、他のプレイヤーが邪魔をしていないか等があった。スクラムコラプシングは相手に押されないための一つの駆け引きであると認識されていると述べる。第三章ではタイトヘッドプロップに焦点を絞り、どのようにすればスクラムを押すことが出来るのか、エンゲージの瞬間どこに注意しながらヒットしているのか、相手の1番とはスクラムの中でどういった駆け引きがあるのかなどといったことをインタビューを交えながら分析した。結論としては相手のルースヘッドプロップに懐に入られないことが重要であった。そのための技術として膝を落として胸を張る、アングルを内向きに変える、頭突き、インパクトなどを紹介する。第四章ではルースヘッドプロップがどうすれば相手を押し、一番側から押し込んでスクラムを崩すことが出来るのか、ヒットの瞬間どこに注意しているのか、相手とはスクラムの中でどういった駆け引きがあるのかなどといったことを解析した。結論としてはルースヘッドプロップが相手スクラムに組み勝つポイントとして最も大切なことは相手の懐に入ることであった。そのためには相手との間に隙間を作り肩をめぐりこませる方法を紹介した。不安定である左肩をいかに有効に使うかがポイントであった。これらの技術は様々な世界中のフロントローが相手を打ち負かすためにルールの際間を縫いながらあみ出してきたものである。試合に勝ったとしてもスクラムが勝てなければチーム全体の雰囲気が悪くなる。スクラムにはラグビーとはまた別の勝負が秘められている。しかし、スクラムを最前列で組んで

いるプロップにはこれほど多くのテクニックや駆け引きの手段があるにもかかわらず多くが反則であるためにこれらの技術は決して表には出てこない。最先端の環境でラグビーをしているものの中で口頭でしか伝わらないのである。やる気もあり、強い足腰もあり、体力もあるがどのようにスクラムを組

むべきかわからないフロントローの選手はどこにもいる。そのような選手のためにもこの研究で提示したスクラムの技術や考え方を多くの人を知るべきであるとする。